

<これからのジュエリー>

今年のIJT国際宝飾展は休み、見学者として赴く。見学者というのは何と気楽で軽やかなことか！日本企業ブースはいつもと変化なく無機質に感じる。元来無機質であるジュエリーがただの冷たい製品に見える味気なさ。それに変化を与えるデザイナーブースは割り当てが狭いので表現が出来ない。イタリアブースは楽しかった！改めて日本との歴史の厚みの差を感じる。1000年と100年程の差は文化、経験としては無理もない。我ら日本人は西洋を真似ることから始まったのだから。それにしても日本のジュエリーは生身の人をつける温かさと楽しさが無い。一方イタリアのジュエリーは精緻でありながら何と温かく楽しく輝いていることか！！

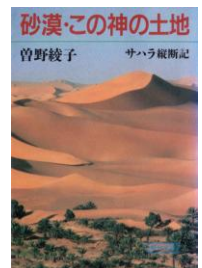
<甲府に来たインド人のカレー屋さん>



友人宅から徒歩圏内にインド人のカレー屋さんが出来た。南出身のこの人、学校に行ったこともなく北で料理を覚え日本に来た。甲府は日本一インド人が多いというから彼らの伝手で来たのだろう。生のスパイスの方が断然美味しい、と聞くと友人は庭の一部をハーブ畑に提供。冷蔵庫や洗濯機も近所から貰った。その小さな店でアーユールベータ（3000年超の歴史を持つインドの伝統医学）による料理教室があるとのことで参加。狭いキッチンで説明しつつ調理する。説明の日本語は我々には意味不明なことも多く質問で度々中断。何とも緩かくのどかな料理教室。このカレー屋さん、最近では表に行列が出ることもあり、隣の大通りに店を移し、今迄の場所はスパイス屋さんをするという。地域の人に支えられ、彼はやがてインドのプチ成功者になるのかも。

<サハラ縦断記>

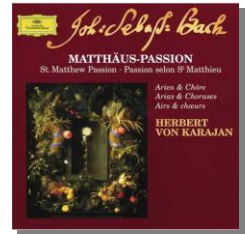
作家曾野綾子の37年前のサハラ旅。曾野は言う。砂漠は巨大な地獄の首都である、と。パリからアルジェに入りひたすら南下、象牙海岸に至る8000キロの6人旅。編集者、カメラマン等本人以外は全て男。地獄を通過するには大量のフィルム450本、



ワイン、ウイスキーもケース数十箱も助けになる。忍耐だけでは潰される。酒も忍耐を和らげる。困りごとに会ったら人を困らせるに限る、と。クリスチャンである本人さえそう書く程の地獄への心構え、19項目の警告は細心の注意を払っても危険であることを物語る。地獄を通過する間の苦闘の中で人間を信じるかとなると、このメンバーの誰もが信じないだろう、と。作家は言う。砂漠を旅する者にとって、砂を読むということは人生を読むようなものである、と書き、〈砂漠の哲学〉とでも言うものをまとめてみようと思う、と書いている。作家というのは、ものを深く観察、思考出来る人たちなのだ。

＜陽水 VS マタイ受難曲＞

数十年前叔母を乗せた車でのこと。車内のテープは、たまたま井上陽水。“何て色気、この人誰？”“ハッ？ 陽水？”最初のステージは甲府の県民会館という古い建物。ひとりギターを抱えて唄う。バンドもバックコーラスもなく、スポット照明のみ。誘ってくれた友人に“何、この暗い人、いいじゃない”友人、ハナタカ。初期は意味不明の歌詞に哲学的な妄想もしたり。ステージは次第にバンド、バックコーラスまで入り、照明も明るくなりアロハシャツで唄う。車の中は陽水かバッハのマタイ受難曲のCDのみ。最近ではマタイの出番の方が多い。



R-0283

モダンと知性を感じるこのグリーンがかった
アクアマリンは薬指にどうぞ！



PNBR-0042

表面がキラキラ輝く珍しいメノウはドイツで入手
but 雰囲気は何故か和を感じる


Setsuko
Jewellery
Shimada

おしゃれ上級者になる
大人の女性のジュエリー展

2020 6/17(水)～21(日) 岡島1Fシャルム